

## 後記

在任三十三年の長きに亘って国文学科のために、また駒澤大学のために御尽力いただいた木村晟先生が平成十七年三月末をもって退任される。『駒澤國文』第四十一号は先生の御退任を記念して編まれたものである。同僚の先生方、また木村先生の薫陶を受けた教え子たちをはじめとする多くの方々から寄稿していただき、また木村先生からも『塵芥』における『下学集』の享受について」と題する玉稿を頂戴し、まことによき記念号となった。稿を寄せられた木村先生をはじめ、諸先生、諸氏に厚く御礼申しあげる。

この数年、国文学科の教員としてともに時間を過した先達を名残り惜しくも送ったが、今年の木村先生との別れには筆者として別種の感慨がある。先生と筆者とは昭和四十七年の春、同時に赴任した仲だからである。上代文学を専攻され、歌人としても知られていた柴生田稔先生、近世文学を専攻され、歌舞伎、浄瑠璃の研究者として知られていた乙葉弘先生も同時に着任されたが、仰げばいや高い両先生には敬して少しく遠ざかり、いつも談を交わしたのは木村先生であった。勤勉で、もの静かで、お酒を嗜むことのない先生とは、勝手気儘に放言するという仲ではなかったが、三十余年の間、学問の先達として、同僚として、いろいろなことを教えていただいた。国語学の上司として山田巖先生がおられたが、あの

お酒の大好きな山田先生がどうして率先して下戸の木村先生を駒澤大学に招いたか、はじめのうちは解しかねたが、ほどなくしてそれが木村先生の御人柄と、その仕事ぶりによるものだということがよく判った。その仕事ぶりは著述目録を一見しただけでも明らかで、そのことは私などもいつも字ばねはならぬと思いつつ、及ばぬことと得心していることでもある。

かくしていつのまにやら先生を送るという時に至った。定年の決まりとはいえ、名残りは尽きない。御仕事の上では先生はこれからも現役であられ、御研鑽は止むこともないであろうが、御健康にはくれぐれも留意され、今後ともわれら後進の者を見守ってほしいと念ずるものである。(高橋文二)

編集委員 近衛典子

岡田 豊

中嶋真也